

「ふつ、山狩りをしたかいがあつたぞ」

勝ちほこる兵馬は十人余りの手勢を連れていた。城下町の剣術道場の仲間だけではなく、この藩の家老である父親に仕える侍まで同行させたのだ。

「うぬがあらわれると見こんで、金掘り衆は先に引きあげさせた。ははは、見てのとおりだ」

兵馬に言われて、十蔵は坑道に目を向けた。

くずれぬように柱で支えられた坑道の入口は、大きな岩でふさがれている。藩主の大名に仕える家臣の中で一番の力を持ち、限られた者しか知らない隠し金山の秘密を守る家老の跡取り息子だからこそ、こうして先手を打つこともできたのだろう。

「何の証拠も持ち帰れねば、金山があるといくら口で言うたところで信用されまい。いずれにせよ、江戸に生きては帰さぬが……な」

すどくくらみつけながら、兵馬は刀を抜いた。

手勢の男たちも次々に抜刀し、十蔵を取りかこむ。

対する十蔵は、山をここまで登るのに用いた杖を右手に持ったままでいる。

「どうした？ 早う抜かぬか」

「やめておけ、加納どの」

答える十蔵の声は落ち着いていた。

「刀とは気安く手にするものではない。生兵法は大げが

のもとだぞ」

「ほざくな、御庭番！」

兵馬が十蔵に斬りつけた。

十蔵はかわすと同時に杖を振るい、兵馬の左の手首と腰を打った。

「うわっ」

兵馬は刀を落とし、悲鳴を上げて倒れこむ。

「兵馬どのっ」

「おのれ、よくも若さまを！」

手勢の男たちが十蔵に襲いかかった。

しかし数が多くても、御前試合を勝ち抜いた十蔵に太刀打ちできるほど一人一人は強くはない。

「おのれ、水瀬っ……」

次々に打ち倒されていくのを、兵馬はくやしそうに見ているばかり。刀を振るう軸となる左手ばかりか腰まで痛めつけられ、戦うどころか起き上がることもできなかった。

最後の一人を打ち倒し、十蔵は駆け出した。

坑道を目指して登ってきた山道ではなく、その先の谷に逃れたのだ。

「待てい」

手勢の男たちがふらつきながらも後を追う。

とつぜん足元の岩がくずれ、十蔵がよろめいた。

「と、止まれっ」